

巻頭言

日本人の高齢化は平均寿命の延伸と少子化の進行により、65歳以上の人口が世界でも極めて高い状態に加速している。2024年の総務省の人口統計によると、65歳以上は総人口の29.3%と約3人に1人に上る。一方、15歳未満は11.2%と65歳以上の半数にも満たない。さらに、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2070年には65歳以上は38.7%に増加し、0～14歳は9.2%とさらに減少するという。

筆者は現在も大学病院で診療に携わっているが、紹介される小児例は極めて少ない。いくつかクリニックでも診療を行っているが、小児患者を診察する割合は明らかに減少している。日常診療の中で、筆者と同様に小児の診察が最近では減っていると実感している先生方は少なくないと思う。

2018年に馬場直子先生に本誌編集委員に加わっていただいたが、その際に斉藤隆三前編集委員長は、「“小児の皮膚病”について造詣の深い先生を編集委員に迎えたのだから、これからはぜひとも小児皮膚疾患の特集号や増刊号を企画していきましょう」と述べられた。その方針通り、例年特集号として小児の感染症、小児乾癬とその類症、小児の膠原病、小児アレルギー性皮膚疾患や先天性皮膚疾患などを取り上げてきた。

そして今回、増刊号『小児の皮膚疾患カラーアトラス』の監修を馬場先生にお願いした。全体的にみると、最初に臨床写真が目飛び込んで関心を高め、解説はコンパクトでわかりやすい。図譜にはありふれた皮膚疾患からまれなものまで列挙されており、馬場先生が長年にわたって小児皮膚疾患に向き合われてきた集大成ともいえる素晴らしい症例集である。新生児から乳児期の皮膚疾患、小児感染症、そして先天性皮膚疾患の3つに大別し、病歴、経過そして治療と解説を加えている。過去の症例報告から選ばれた疾患は現症、治療と経過、鑑別疾患と整理されて実に読みやすい。忙しい日常診療の合間にみても「すぐに役立つ」「すごく役立つ」内容である。湿疹、おむつかぶれ、皮脂欠乏症などありふれた疾患であれば問題がなくても、見慣れない皮膚変化を見落とす危険性は少なくない。

筆者は医療事故予防の観点から、臨床写真の撮影を推奨している。初診時には気づけない微細な変化や徴候も、経時的にみていくと典型例の様相を示してくれることがある。また後日、教書や文献をみて診断確定に至ることもある。日常診療で診察した記録として“お写真を残しておきましょう”と付き添いの家族の了解を得て撮影し、カルテに残しており、次回受診時に比較してその違いを患者やその家族と診療情報を共有している。

本書は診療現場での“座右の書”になると期待している。皮膚科学を学び始めた若い医師はもちろん、普段小児を診察する機会の減った諸先生方にも役立つ一冊になっているので、ぜひともご一読いただきたい。

向 井 秀 樹